和を尊ぶ 日本の心を育んだ 「神仏一如」



臨済宗円覚寺派管長 横田南嶺老師 ● 横田南嶺老師

石川真理子の人物探訪

特別回 前編

今回ご紹介いたしますのは、北鎌倉は円覚寺の横田南嶺管長です。あの鍵山秀三郎先生（日本を美しくする会相談役）をして「現仏教界にて唯一人挙げるなら」と言わしめ「清澄の人」と称された横田管長ですが、私にとりましても心よりご尊敬申し上げる御方です。このたび不思議なご縁により『きらめきプラス』の取材にご協力いただきました。貴重なお話を前後編二回にわたり掲載いたします。前編では「和」をテーマにお教えいただきました。

横田南嶺（よこたなんれい）

昭和三十九年和歌山県生まれ。六十二年筑波大学卒業。在学中に出家得度し、卒業と同時に京都建仁寺僧堂で修行。平成三年円覚寺僧堂で修行。十一年円覚寺僧堂師家。二十二年臨済宗円覚寺派管長に就任。著書に『いろはにほへと　ある日の法話より　一～三』（インターブックス）、『祈りの延命十句観音経』（春秋社）、『禅の名僧に学ぶ生き方の智恵』（致知出版社）、最新刊に『二度と無い人生だから、今日一日は笑顔でいよう～生きるための禅の心』（PHP研究所）。DVDに『精一杯生きよう』（禅文化研究所）、CDに『三師の説法』『一道を極める』（ともに致知出版社）など。

鎌倉五山第二位。
山号 瑞鹿山。
ご本尊 宝冠釈迦如来。
開基 北条時宗。

弘安五年（一二八二）執権北条時宗が宋より無学祖元禅師を招き開山、元寇で戦死した武士と元軍兵士がともに供養される。開山以来、北条氏をはじめ朝廷や幕府からの帰依を受ける。たびたび火災に遭うも明治時代の廃仏毀釈にも耐え開山以来の宝物が継承され、その多くは国宝および重要文化財に指定されている。明治以降は今北洪川老師により一般の人々にも坐禅の門戸を開き鈴木大拙や夏目漱石なども参禅。現在に到って多くの人々が坐禅に親しんでいる。

●神奈川県鎌倉市山ノ内四〇九
電話 〇四六七（二二）〇四七八
北鎌倉駅下車すぐ



神道・仏教は本来ひとつ

「和」とは何か。

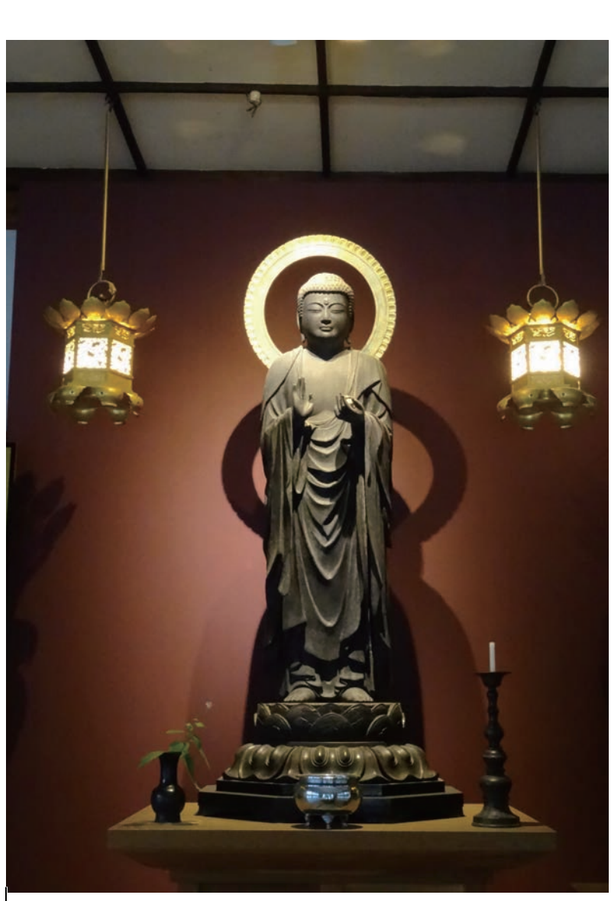
私たちは気軽に「和」という言葉を使いますが、その実、意味をどれだけ理解しているでしょうか。和とは日本的なものを表す場合に使われますが、ではその「日本的」とはいったいどういうものなのか。

平成二十五年の伊勢神宮式年遷宮に伴い、あらためて『古事記』が脚光を浴びました。『古事記』は単なる神話に留まらず民族の精神性の原点をも表わすものといわれます。『古事記』の編纂は和銅五年（七一二年）とされますが、そのころすでに仏教が伝来しています。飛鳥時代、五五二年ごろ（五三八年や五四八年との説もあり）のことで、百済の聖明王から欽明天皇に仏像や経典などが送られたことをもって日本仏教の始まりとされています。混乱はあったものの、やがては神道と融合し物の見事に浸透していきました。外来のものを日本的なかたちにして受け入れていくのは日本人の特徴といえますが、日本における仏教も「日本仏教」と称して差し支えない姿となっていったのです。

神仏一如。ここに「和」を解く鍵があります。

「現在のように神道と仏教が別々のものとされるようになったのは、実は最近のことです。明治時代の廃仏毀釈によるものですが、それまでは神も仏も一体のものとして考えられていたのです。ここ鎌倉でも鶴岡八幡宮などはもともと鶴岡八幡宮寺といって、五重塔や梵鐘などがありました。それが自然な姿だったのです。皇室も明治以前は神道はもとより仏教も規範としていました。聖武天皇は鑑真和上から戒律を授けられていますし京都の泉涌寺は皇族ゆかりの寺院です」（横田南嶺管長 ※以下、「」は横田管長談）

聖武天皇といえば奈良東大寺の建立で知られていますが、宇多天皇は仁和寺を、亀山法皇は南禅寺を建立するなど多くの天皇が寺院を建立しています。僧侶となった皇族の方も少なくありません。今では「皇室＝神道」という印象ばかりですが、もともとはそうではなかった。また、かつては各家庭においても神棚と仏壇があるのが当たり前でした。ついでながら、山形県南陽市にある熊野神社には洪鐘があります。神仏混合の名残を留めた珍しい光景です。山形の熊野神社は紀国熊野権現の勧請を受けて建立されましたが、横田管長の生まれ故郷はまさしくその熊野権現のお膝元、紀州熊野です。



熊野神社と一遍上人

「紀州の熊野本宮大社には鎌倉時代に一遍上人がお参りしています。一遍上人は三十三歳で出家し、三十五歳から念仏札というのを配り始めました。それによって人々に阿弥陀様とご縁を結んでもらいたいとしていたんですね。ところが、受け取ることを拒んだ人がいた。満座の中で受け取ってもらわないわけにはいかないと、一遍さんは無理矢理押しつけてしまうのですが、この一事によって迷ってしまうんですね。信をおこさない人に対しては、いったいどうすれば良いのかと。そこで答えを求めて熊野神社に参籠し祈りを捧げたところ熊野権現が表れて『信不信を選ばず』とのお告げを下された。信じようと信じまいと、それは問題ではないということです。なぜ僧侶に神様が答えるのかと不思議に思われるかも知れませんが、熊野本宮の主祭神である家都美御子大神の本地仏は阿弥陀如来なんです。そして、那智大社は観音様、速玉大社は薬師如来。八百万の神々は仏の化身として現れた権現であるという考え方を本地垂迹といいます。一神教的な見方からすれば理解できないことなのかもしれませんが、非常に素晴らしい受け止め方だと思うんですね。熊野権現、つまり阿弥陀様の教えを受けた一遍上人は自信を得て阿弥陀様のお札を配り続けました。浄土宗の法然上人はお経を唱えることで救われるとし、浄土真宗の親鸞上人は信じる心を起こした時に救われるとしましたが、一遍上人は信じる前に救われているとしています。これは人は皆仏の心を持っているとする私ども禅宗に近いんです。一遍上人も後に参禅をしています」

神々のお膝元で暮らしている

熊野の地で横田管長が座禅を始めたのはわずか十一才、まだ小学校五年生のころです。

「その時、興国寺の目黒絶海老師より白隠禅師の言葉を教えられました。坐禅をすると天神七代地神五代並びに八百万の神々心中に鎮座ましまする、というものです。なんと坐禅とはすごいものだろうかと感動しました」

以来、横田管長は熱心に坐禅に通うようになります。初めての独参は中学二年生。目黒絶海老師に公案（禅の問題）をいただいたとのことです。高校時代に山本玄峰老師ゆかりの旅館の女将から「あなたはお坊さんになる方だ」と言われ、松原泰道師をはじめ小池心叟老師、足立大進老師など名立たる師のもと一筋に仏道を生きてこられた。ほんとうにお坊様になるためにお生まれになった方なのでしょう。

熊野は現在においても聖地です。横田管長は熊野で生まれ育ったことそのものに深い感謝を抱いているといいます。

「この世に生を受けて何より有難いことは十八の歳まで熊野にいることができたということです。私ども熊野の人間にとっては神様はいるいないではなく当然で疑う余地もありません。我々人間は神様のお膝元で暮らさせていただいているのです。山は神様です。山に入るときは敬虔な気持で入らなければいけない。悪いことを言ったり、思ったりもしてはいけないのです。熊野古道が世界遺産になったため訪れる人が増えましたが、時々、なぜと思うような事故があります。でもそれには必ず理由があります。地元の者には分かります。敬虔な気持を失ってはならないのです。花火大会の時などはよく雨が降りますが、これは神様がうるさいと怒っているからだと教えられました。熊野の人間にとってはこれが普通の感覚なのです」

科学の発展と物質文明によって現代人の多くはこのような感覚をほぼ失ってしまったといっていいでしょう。こと都市部で暮らす人々がどれだけ実感できるか甚だ疑問です。

けれど仏教が伝来した当時の日本人は、まさしくこの感覚であったはずです。日本における仏教の祖である聖徳太子にとっても神の存在などあまりに当然だった。ゆえに神仏の融合も一時的な論争があったにせよ、ついには無理なく融合していったのでしょう。さらに仏教ならではの論理性は秩序をもたらすうえで大いに役立ったはずです。

「仏教を取り入れることによって生活の規範ができたり、国を治めるうえでは望ましい面もあったのでしょう。神道は岩や滝など自然のものがご神体ですが、仏像を拝むというのも、人々の心に尊敬心を呼び起こし豊かな精神性を育むと思われたのではないでしょうか」

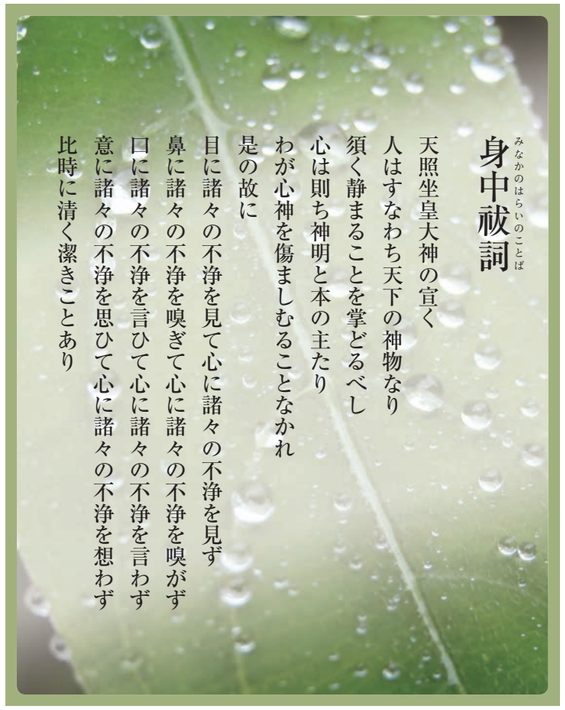


草木にも心がある

「私はお坊さんではありますが毎朝独自に大祓の祝詞を唱えているんです。

「たかあまはらにかむづまりますめらがむつかむろぎかむろぎのみことをもちて…」

という詞で意味などはわからないのですが、唱えていると日本人の魂が目ざめてくるような気がします。それに大和言葉の響きが素晴らしいですね。神道の祝詞に身中祓（みなかのはらい）というものがありますが、もしかするとこれは仏教の教えが影響しているのかもしれません。



我身は則ち六根清浄なり（わがみはすなわちむつのねきよらかなり）というのですが、この六根清浄というのは仏教の考え方です。神道を学ぶと仏教の教えがますますわかるような気がしますし、神道の人がどう感じているかはわかりませんが、互いに学び合うとより理解を深めることができるのではないかと思います。日本人は草木にも神仏が宿ると感じるものですが、これはやはり一体のものとして生活に浸透してきたからでしょう。インド仏教を正当に受け継ぐチベット仏教では、草木には仏の心はないとしているんです。このことからも、日本ならではであることがわかります。

草木にも心有りけり我見よと
けさささきそめる庭の白萩

これは円覚寺の誠拙禅師が詠まれた私の好きな歌です。朝起きてみると庭の白萩が見てくださいといわんばかりに咲いている。草木にも心があるとする、これが日本の心です。ただ、最近はお天道様という言葉も失われつつあります。朝陽に手を合わせる、月を愛でる、そこに神仏の心を感じるという感性が日本人から失われつつあるとしたら、実に残念なことです。スーパームーンという言葉があるようですが、日本語には月にまつわる美しい言葉がたくさんあります。これは大事にしていった方が良いと思っています」



他を排斥しない

横田管長が一編の詩をお示しくださいました。仏教詩人とも称される坂村真民氏の作品です。

高校時代、真民の詩に深い感銘を受けた横田管長は手紙を書き、以来、氏より毎月詩誌『詩国』が届けられるようになったとのことです。坂村真民氏にとっても真理を求める少年の心が嬉しかったのでしょう。今や横田管長は真民詩の語り部でもあります。



みめいこんとん

わたしがいちにちのうちで
いちばんすきなのは
みめいこんとんの
ひとときである
わたしはそのこんとんのなかに
みをなげこみ
てんちとひとつになって
あくまのこえをききき
かみのこえをききき
しょぶつしょぼさつのこえをききき
じっとすわっている
（以下略）

（『坂村真民全詩集 第二巻』大東出版）



「これは真民先生の詩ですが、古代の日本人はこの未明混沌を感じていたのではないでしょうか。非常に深いところ、根源的な感覚です。そして注目すべきは、〔あくまのこえをきき〕、という点です。悪魔を排除していない。荒ぶる神も神様なんです。『古事記』には実に個性豊かな神様が登場していて、中には少し困った存在もあるわけですが、それをまったく排斥しない。この未明混沌、他を排斥しない、分け隔て無いという感覚なり考え方を仏教も大切にしたのでしょう。違いを認め、排斥しないことによって、お互い様という助け合う心、支え合う心、相手を許す心も育まれていって、やがては他者の喜びを自らの幸福とする日本人の美風になっていったのではないかと思います」



古来日本人は天地自然と寄り添いながら暮らしてきました。自然は恵みをもたらす一方、時に災害をももたらします。自然災害はまさしく荒ぶる神です。荒ぶるからといって排除することはなく、またできもしない。感謝と畏怖とを同時に抱けば心は謙虚になり、おのずから手が合わされます。



神と自然と我と一体

「昔、熊野本宮大社は大斎原という中州にありました。川が氾濫したりすると流されてしまいます。流されたら建てなおしました。流されては建て、流されては建て、とやってきたのです。それがあまりに大変だからと明治時代に現在の場所に移されましたが、やはり大斎原が本来の場所であると私は感じますし、流されては建てるというあり方そのものが尊く思われます。伊勢神宮にしても石の神殿を建てようとせず二十年ごとに建て替えていますね。現代の考えからすれば不合理なことなのかもしれませんが、理屈を超えた大切な意味があるのです。私の祖父母も河原で鍛冶屋を営んでいました。そして氾濫しそうだとみるや家を解体し担いで丘の上へ避難しました。収まればまた元の場所に家を建てます。まさしく自然に寄り添う暮らしであり、荒ぶる神を排除しない暮らしです。神と自然と我とが一体となっていた。私が子供のころ川遊びをした熊野川は高度経済成長期に砂利の採石場となりました。それに伴い大水が出ないようダムが十数個造られました。しかし五年前、紀伊半島大水害が起きた。十数個のダムをもってしても防げなかったのです。確かに千年に一度といわれるような大雨だったかもしれません。しかし人間が自然を制御することができるのでしょうか」



大宇宙、大和楽

東日本大震災が起きて一ヶ月後の平成二十三年四月十一日、鎌倉において神道、仏教、キリスト教合同の「東日本大震災　追悼・復興祈願」が行われました。これまでなかったことであり、新聞各紙も大きく取り上げたものです。第一回目は鶴岡八幡宮、第二回は建長寺、第三回はカトリック雪ノ下教会と会場を変えながら行われてきました。円覚寺は去年（平成二十七年）会場となっています。

「キリスト教では偶像崇拝は禁じられていますから、ご本尊を隠しましょうかとお訊ねしたんです。上から幕を降ろせば仏像を隠せるようになっているんです。しかし司祭さんがそのままでいいとおっしゃってくださいました。ありがたいことです。日本だからできることなのかもしれません。大切なのは祈る心です。ご冥福を祈り、



一致するものを見いだす

近代文明による科学の発展は人知によって自然を制するという幻想を私たちに抱かせたといっていいでしょう。そうした中で日本人の精神性は確実に揺らいできていると筆者は感じています。違いを認め、他を排斥しないという日本人の心は加速度的に変化し、時には違いをあげつらうようなことにさえなっています。

「坂村真民先生の詩に『ユニテ』というものがあるんですね。これは一致するところを見つけていこうというものです。誤解のないように申し上げますが、統一しようということではないんです。統一しようとすると、むしろ争いになる。和して同ぜずという言葉があるように、違いは違いで受け入れながら、同化するのではなく一致するところで認め合っていこうということです。以前寺で預かっていた学生さんが留学先から帰国して久しぶりに訪ねてきてくれました。そして、結婚するというのですね。私は喜んだのですが、彼は浮かない顔をしている。訊いてみると、彼女がクリスチャンで結婚式は教会でやりたいというのだそうです。しかし自分はお世話になった円覚寺でやりたいと。私は彼に彼女のことが好きなのかと問いただしました。好きだという。だったら教会でやればいいと言いました。彼女が日曜日には教会で一緒にお祈りをしてほしいと言っているというから、それもそうしてあげなさいと。ただし、お祈りをするときは腰骨を立てて行えば坐禅にもなると言いました。そうしているうちに、ひょっとしたら彼女も坐禅に興味を持ってくれるかも知れない。そうなったらその時は連れておいでと伝えたんです。おかげで今のところ宗教対立はせずに済んでいます（笑）」











復興を願う、この心は一致しているのです。どのような形式で祈るかはそれぞれでいい。この追悼・復興祈願をきっかけに、鎌倉ではお互いに学び合おうということになりました。私どもが宮司さんのお話を聴きにいったり、キリスト教の教えを学んだり、あるいは坐禅にお越しいただいたりという交流をしています。たいへん勉強になります。それぞれに良さがあり、実にいいものです」



「本来どの宗教にしても人の幸せや平和を願うものであるはずです。それなのに違いに目を向けてしまうから争いとなる。宗教に限らず人間同士にしてもそうです。違いを言い出したらきりがありません。人はそれぞれですが、根本となること本質的なことは、そう変わるものではありません。それがわかれば認め合うのはさほど難しいことではなくなるはずです。こういうあり方を求めていくことができれば、私たちはもっと豊かにそして穏やかに生きていくことができるのではないでしょうか。大宇宙大和楽というのは、日本人の本来的な精神性をあらわしていると思います。これが私たち日本人の根源にある和ということではないでしょうか」

万物に心を感じ、そこに感謝と畏怖を抱き、一致するところを求め他を排斥しない。

日本に和の心があったればこそ二千年余りの歴史を有する希有な

国となりえたのです。この事実は民族の誇りであり決して失ってはならぬものです。

いま「和」は世界的に注目されています。まずは私たち日本人があらためて和について学び、日々の暮らしに生かしていきたいものです。



【取材後記】終始おだやかにお話しくださった横田管長。平易な言葉のなかにどきりとするような真実があり、すとんと腑に落ちることばかりでした。毎月の法話は約五〇〇名もの人々が訪れるほどの人気ですが、このようにわかりやすく禅の心、日本の心をお話しくださるがゆえです。読者の皆様も機会がありましたら、ぜひ参加されてみてください。

最新刊

二度と無い人生だから、今日一日は笑顔でいよう ～生きるための禅の心～

PHP研究所

横田管長ご自身が幾度も救われたという坂村真民氏の詩を通して、生きるとは何か、愛するとは、家族とは、平和とは、など、誰もが漠然と抱く問いかけに答える一冊。魂が揺さぶられるような真民氏の詩と、禅の心をやさしく語る横田管長の言葉が見失いがちな大切なことを教えてくれます。



禅の高僧に学ぶ生き方の智恵

致知出版社

円覚寺由来の高僧を主に、無学祖元、夢窓疎石、正受老人、白隠禅師、誠拙禅師、今北洪川、釈宗演の物語。禅僧についてはもとより生きる意味と意義を深く学ぶことができます。



祈りの延命十句観音経

春秋社

延命十句観音経を紐解きつつ、横田管長のこれまでの歩みやさまざまな出逢いが記された心に沁みる一冊。横田管長による延命十句観音経の和讃も素晴らしいものです。



いろはにほへと ある日の法話より 一～三巻

インターブックス

横田管長が法話でお話しされた内容が端的に綴られた本。何気ない言葉が静かに心深く満ちていきます。四季折々の美しい写真も魅力。



坐禅会

日曜説教坐禅会
毎月第二日曜
横田南嶺管長による法話と坐禅
法話 午前九～十時
坐禅 午前十～十一時（自由参加）
場所 大方丈

暁天坐禅会
年中無休
但し一月一～七日、十月一～五日および行事の際は休み
午前六～七時
場所 仏殿

その他、土曜坐禅会・日曜坐禅会・学生坐禅会・写経会など催されています。また、さまざまな年間行事も行われております。詳しくはホームページをご覧ください。

――円覚寺公式サイト――
http://www.engakuji.jp